

## 高岡の特産産業

高岡の特産産業の起こりは、今から約 400 年前、加賀藩二代藩主、前田利長公が高岡に入城し、鋳物工場の開設、綿取引所の許可など、新しいまちづくりのための産業振興に力を注ぎ、保護育成を図ったことに始まる。古くから育まれた高岡の産業は、その後、全国に誇りうる地場産業として目ざましい成長を遂げ、そこから発展した伝統的技法等は、商工都市高岡の原動力となっている。

このように、伝統と特色ある地場産業に支えられ、「ものづくりのまち」として発展を遂げた高岡市は、平成 21 年に開町 400 年の節目の年を迎えた。銅器や漆器、仏壇に代表される伝統産業は、先人のたゆまぬ努力によって培われた匠の技術・技法を今日まで継承し、独自の発展を遂げてきている。また、アルミニウム等の近代産業も発展し、多様な産業基盤が根付いている。

さらに、平成 20 年 4 月には、これまで生産に重点を置いていた金工、漆工等の分野において、高岡地域文化財等修理協会が設立され、修理ビジネスという新たな市場を開拓するとともに、富山大学芸術文化学部と連携し、後継者育成、技能の継承に取り組む新たな動きも出てきている。

また、平成 29 年 11 月には、「越中福岡の菅笠」が伝統的工芸品として認定されたため、今回の調査から新たな項目として追加することとした。

## 調査要領等

この調査は、業界振興の基礎資料とするために、高岡の地場産業の生産、出荷、販売動向等を、主な事業所を対象に実施した。掲載されている数値等は、回答のあった事業所の数値等を累計したものである。

調査の方法は、アンケート調査により、隔年調査として実施している。今回のアンケートの回収率は、71.6%であった（前回 70.5%）。

調査対象期間は、各企業における、平成 30 年度決算期間である。

## 目 次

高岡の銅器・鉄器	1
高岡の漆器	9
高岡のアルミニウム	14
高岡の仏壇	18
越中福岡の菅笠	21

## 高岡の銅器・鉄器

### 【産地の特色】

高岡銅器は、慶長 16 年(1611 年)に加賀藩二代藩主前田利長公が高岡のまちの産業振興策のひとつとして、現在の高岡市金屋町に鋳物工場を開設したことに始まる。当時は鍋・釜・農機具などの鉄鋳物が主体であったが、幕末から銅器美術工芸品へと発展し、明治時代にパリ万国博覧会に展示されるなど、世界的に知られることとなった。戦時中、軍事使用のため金属が手に入らず、壊滅的な打撃を受けたものの、戦後、先人たちの努力により、急速に復興し、さらに新製法の導入により大量生産体制が確立され、昭和 50 年2月には伝統的工芸品として国の第一次産地指定を受けている。

産地の特徴として、製造・加工部門では工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集団的色彩が強いことや、集積度合いが全国の産地に比べ、かなり高いことなどが挙げられる。製造業者は作ることに専念し、新商品開発や販売機能はほとんど産地問屋が担うという分業体制が採られてきたが、近年、産地問屋からの発注が減少したこともあり、独自に国内外に販路開拓を行う製造業者が増えてきており、銅器産業の構造に変化が見受けられる。

### 【銅器・鉄器の動向】

平成 30 年度販売額は、銅器が約 103 億 1 千万円で対 28 年度比で 6.8%減少した。鉄器は約 2 億 9 千万円で対 28 年度比で 13.9%減少している。中国における鉄瓶ブームの影響もあり平成 26 年の鉄器販売額が増加したが、平成 30 年あたりから鉄瓶の販売額は減少した。

銅器・鉄器の合計販売額は約 103 億円 1 千万円で対 28 年度比で 7.1%減少している。国内での販売額が減少しているものの、販売先における輸出の割合は約 2 倍に増加し、輸出額も増加している。

平成 30 年 11 月に、高岡銅器における国の伝統的工芸品の指定の一部改正により、既に指定を受けている「焼型鋳造法」「双型鋳造法」「蠟型鋳造法」に加え、本市において現在主要な製法である「生型鋳造法」が追加指定された。

また、平成 30 年に伝統工芸高岡銅器振興協同組合が国宝薬師寺東塔の「相輪」の水煙や宝玉の新調・修復を手掛けた。精巧に再現された国宝を通して、高岡銅器の技術力の高さを伝えることに貢献した。

# 高岡の漆器

## 【産地の特色】

高岡漆器は、加賀藩二代藩主前田利長公の産業振興策のひとつとして始まる。当初は、箆笥、長持、針箱、膳などの生活用品や家具が主であった。その後明和年間(1764～1772)に中国風の様式が取り入れられ、明治初期までに現在の高岡漆器の特徴である「彫刻塗」「勇助塗」「青貝塗」の3技法が確立され、産地の名声を内外に高めることとなった。これらの技は、歴代の名工によって伝えられ、多くの名作が作られるとともに、国の重要有形無形民俗文化財の高岡御車山に凝縮されており、高岡の文化として今日に継承されている。昭和50年9月には伝統的工芸品として国の産地指定を受けている。

高岡銅器同様、工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集団的色彩が強いことも大きな特徴である。

## 【漆器の動向】

平成30年度の高岡漆器の販売額は、約4億2千万円で対28年度比で32.7%減少している。販売額は1980年(昭和55年)をピークに減少しており、品種別にみると、これまで最も多くの販売額を占めてきた盆類が対28年度比で41.6%減少している。

販売先は、関東地方が最も多く全体の66.4%であった。

加工業者については、事業者数、従業員数ともに減少傾向にある。とくに加工業従業者を年齢構成別にみると、60歳以上の割合が平成28年度は64.4%であったのが、平成30年度には74.2%に増加しており、高齢化が進んでいることが表れている。

近年の新しい取り組みとして、平成27年度から、伝統工芸高岡漆器協同組合は産学官連携により、漆とセルロースナノファイバーを融合した高機能素材の開発・試作商品化事業の実施があり、漆をこれまでにない素材と組み合わせることで漆の新しい可能性に挑戦している。

高岡漆器の伝統の技術を継承しながらも、従来の枠にとらわれない新規販路開拓や商品開発を模索している。

## 高岡のアルミニウム

### 【産地の特色】

高岡のアルミニウム産業は、本市の伝統産業である銅・鉄器の鋳物技術をもとに、昭和初期に鍋・釜などの日用品を製造し、近県及び中京方面に出荷したのが始まりである。戦後の経済復興と日本経済の成長からアルミ需要が拡大し、本市では豊富で低廉な電力と水を背景に、アルミ業界は急成長を遂げた。現在、住宅用・ビル用建材を中心に、エクステリア製品、家庭用厨房品、機械車両部品などを生産している。アルミ建材分野においては、本市の中核的産業をなすだけではなく、全国的な生産規模を誇り、富山県におけるリーディング産業の地位を確立している。

近年は、消費者意識の変化により、大量生産・大型消費の時代から少量多品種生産の時代へと移行しており、それに対応できる生産体制づくりに取り組んでいる。

### 【アルミの動向】

平成 30 年度のアルミニウム製品の出荷額は、約 2,901 億 2 千万円で対 28 年度比 13.7%減少となった。内訳は、ビル用建材が約 662 億 5 千万円で対 28 年度比 5.3%減少、住宅用建材が約 663 億 5 千万円で対 28 年度比で 18.2%減少となっており、本市のアルミ産業のうち大きな構成要素である建材が減少している一方、エクステリアが約 599 億 8 千万円で対 28 年度比 10.1%増加し、日用・厨房品が約 47 億 2 千万円で横ばいとなった。

本市で大きなウエイトを占める建材分野については、平成26年4月からの消費税増税による新規住宅着工数が減少したことなどが影響し出荷額が減少したものと考えられる。非建材分野については、自動車や産業用機械等におけるアルミ需要が高まり、増加したものと考えられる。

また、平成 30 年度よりアルミ産業の成長力強化を図り、新たな事業創出を目指すことを目的に「とやまアルミコンソーシアム推進協議会」が発足した。産学官が連携し新たなニーズ創出に向けた技術開発の取り組みが行われている。

# 高岡の仏壇

## 【産地の特色】

高岡の仏壇は、慶長年間に指物師大場庄左衛門が高岡に移り住んで家具を作り、漆塗装を行ったとする記録があることから、このころが高岡での仏壇製造の始まりとされている。その後、天保年間に仏壇塗師高森重次郎の活躍などにより、少なくとも 150 年前には現在の高岡仏壇の基盤ができあがったものと考えられている。

当産地は、真宗王国という風土のもとで、藩政時代から今日まで、規模は大きくないものの、堅実な産業として地歩を固めてきた。

高岡仏壇は、材料にくさまき・いちよう材を使用している。これは、全国でも高岡だけが使用しており、長年の耐久力は最も優れていると云われている。また、高岡銅器の彫金の伝統を受け継いで冴えた技法を展開し、独自の工法による耐久力に優れた表金具の使用箇所が多いことも特長である。さらに、彫刻の使用部分が多く、金箔が仏壇内部に箔押されて、荘厳かつ美装華やかである。高岡仏壇は、古来の技術を継承し、あくまでも漆塗りを堅持している。まさしく、高岡の伝統技術の粋を集めているといえる。

## 【仏壇の動向】

平成 30 年度の仏壇販売額は、約7億5千万円で対 28 年度比で 6.3%減少した。

仏壇の販売先は、高岡市内が 17.4%であり、市内を含めて富山県内が 93.0%であった。販売先に占める県内の割合は、9割以上であり、年々増加傾向にある。

家族構成や住宅事情、生活様式等の変化をうけて、近年では従来の仏壇の需要が減少していると考えられる中、その変化に合わせて仏壇の小型化や、今の住宅様式に似合うデザインなど新商品開発や、新規販路開拓が必要であると考えられる。

# 越 中 福 岡 の 菅 笠

## 【産地の特色】

越中福岡の菅笠は、江戸時代に加賀藩が生産奨励したことから越中福岡の菅笠も仲介人・問屋の手で全国へ流通した。菅笠は、素材のスゲが天日干しにより薄黄色になり、撥水・防水、防虫・芳香などの特性を持ち、笠に仕立てれば軽いうえに両手で作業ができることから、農作業の日除け・雨除けの必需品として重宝されてきた。

製造方法は当時から家内労働的な分業体制が中心で、現在に引き継がれている。他の産地と異なる点は、地元で原材料のスゲを地元で確保できることで、産業として成り立っている国内最大の産地であり、全国に向けて出荷している点である。

福岡町では、平成 20 年に「越中福岡の菅笠製作技術保存会」を結成して、技法を守る後継者育成活動等を行っている。一方、減産が続くスゲ栽培の対策として「越中福岡スゲ生産組合」を設立して、栽培農家への支援策と新規参入者や営農組合による栽培を実施している。

平成 21 年 3 月には「越中福岡の菅笠製作技術」が国の重要無形民俗文化財に、さらに平成 29 年 11 月には「越中福岡の菅笠」が国の伝統的工芸品として指定を受けている。

## 【菅笠の動向】

平成 29 年 11 月に「越中福岡の菅笠」が国の伝統的工芸品として指定を受け、平成 30 年度版より菅笠を本調査対象に加えた。

平成 30 年度の菅笠・菅製品販売額は、約5千万円であった。

販売先は、北信越地方と関東地方が同率で 34.0%であった。

平成 29 年 3 月には「越中福岡の菅笠振興会」が設置され、販路開拓や新製品開発など新しい時代の生活様式に対応するための振興活動を目指した取り組みがなされている。販路開拓や新製品開発などの取組により、今後の菅笠産業の活性化を期待したい。